

第七回 八戸市遺跡調査報告会



田面木遺跡第33地点

展示遺跡

● 田向遺跡

八戸市大字田向 縄文〜近世

発表

● 「絵図から見た八戸の城下」

藤田 俊雄 八戸市教委文化財課文化財GL

展示・報告遺跡

● 田面木遺跡

八戸市大字田面木 縄文、奈良、平安

杉山 陽亮 八戸市教委文化財課学芸員

● 八戸城跡

八戸市内丸 縄文、弥生、古代、近世

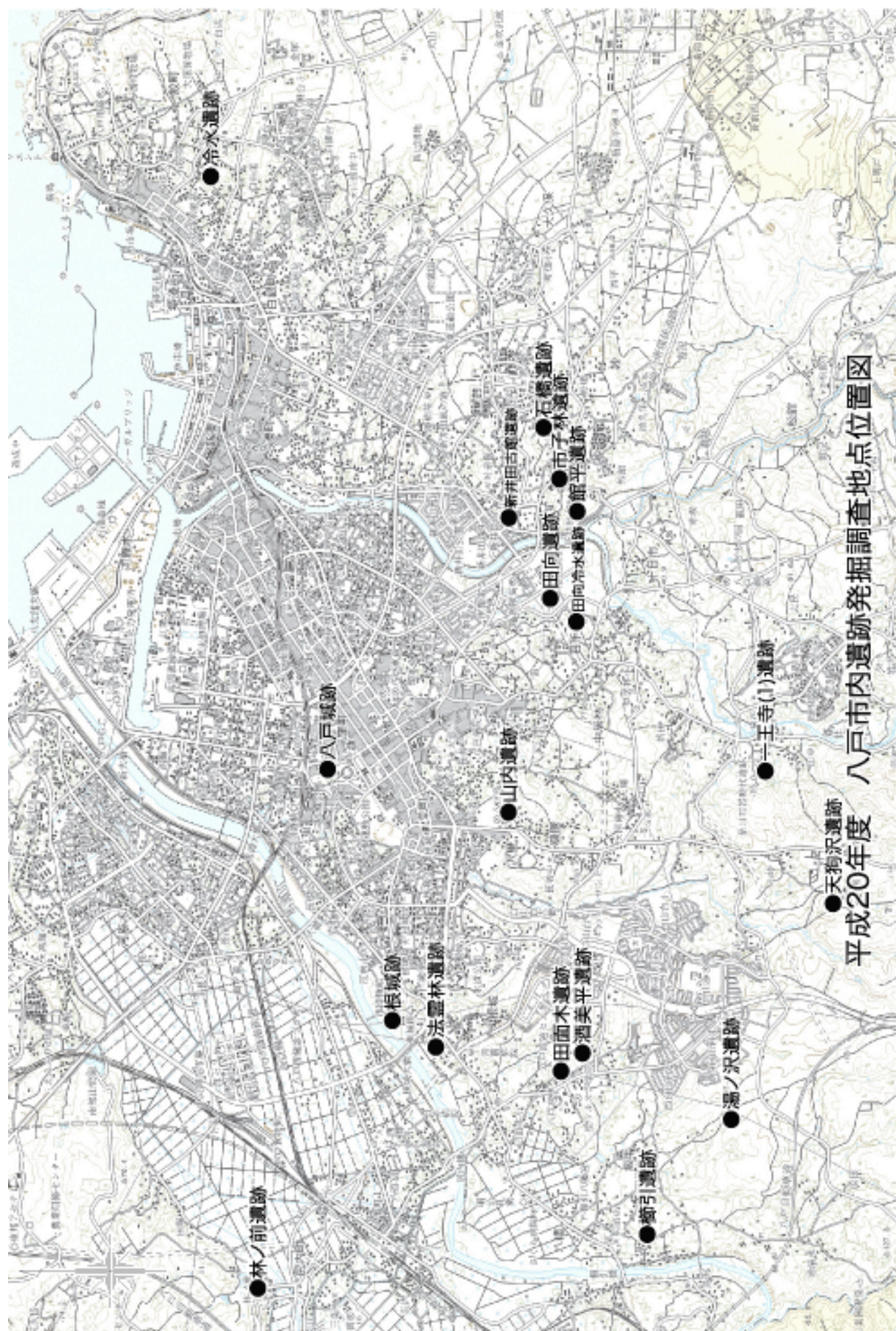
船場 昌子 八戸市教委文化財課学芸員

● 一王寺(1)遺跡

八戸市大字是川 縄文早期〜晩期、弥生、奈良時代

小久保 拓也 八戸市教委文化財課学芸員

2008年11月15日(土)
八戸市教育委員会 (文化財課)
於：八戸市総合福祉会館



平成20年度 八戸市内遺跡発掘調査地点位置図

遺跡名	所在地	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因	種類	主な時代	遺構	遺物
田面木遺跡	八戸市大字田面木地内	4月14日	6	個人住宅建築	集落	古代	×	×
冷水遺跡	八戸市大字鮫地内	4月15日	5	個人住宅建築	包含地	縄文	×	○
天狗沢遺跡	八戸市大字是川地内	4月25日	2	植林	包含地	縄文・平安	×	×
一王寺(1)遺跡	八戸市大字是川地内	4月28日～7月8日	800	範囲・内容確認	集落・貝塚	縄文・古代	○	○
田面木遺跡	八戸市大字田面木地内	5月14日～6月2日	12	個人住宅建築	集落	古代	×	×
酒美平遺跡	八戸市大字田面木地内	6月10日	18	道路舗装	集落	縄文・平安	×	×
櫛引遺跡	八戸市大字櫛引地内	6月13日	2	個人住宅建築	城跡	縄文～平安	×	×
法霊林遺跡	八戸市大字田面木地内	7月7日	17	個人住宅建築	散布地	平安	×	×
館平遺跡	八戸市大字新井田地内	7月23日	33	個人住宅建築	集落	縄文～平安	×	×
石橋遺跡	八戸市大字妙地内	7月25日～7月29日	115	道路舗装・造成	集落	平安	×	×
一王寺(1)遺跡	八戸市大字是川地内	8月26日	19	個人住宅建築	集落・貝塚	縄文・古代	×	×
湯ノ沢遺跡	八戸市大字櫛引地内	9月4日～9月30日	320	最終処分場建設	散布地	縄文・古代	○	○
新井田古館遺跡	八戸市大字新井田地内	9月9日～10月27日	300	下水道工事	集落	縄文・古代・中世	○	○
林ノ前遺跡	八戸市大字尻内町地内	4月14日～9月30日	700	土取り・植林	集落	縄文・古代	○	○
根城跡	八戸市大字根城地内	4月17日～4月30日	70	個人住宅建築	城館	中世・近世	○	○
田面木遺跡	八戸市大字田面木地内	4月23日～6月27日	1,360	長手作付け	集落	古代	○	○
八戸城跡	八戸市内丸地内	5月30日～7月18日	63	個人住宅建築	集落	近世	○	○
八戸城跡	八戸市内丸地内	6月2日～9月5日	600	中央児童館建築	集落	近世	○	○
田向冷水遺跡	八戸市大字田向地内	7月2日～9月30日	2,210	土地区画整理	集落	旧石器～近世	○	○
田向遺跡	八戸市大字田向地内	7月16日～9月30日	2,566	土地区画整理	集落	縄文～近世	○	○
市子林遺跡	八戸市大字新田地内	8月25日～8月29日	38	個人住宅建築	集落	縄文・平安	○	○
新井田古館遺跡	八戸市大字新井田地内	9月18日～10月24日	200	道路築造	集落	縄文・古代・中世	○	○

試掘調査

本発掘調査

1. 遺跡の歴史的環境

本遺跡は、八戸市庁から南へ約4km、遺跡東側を流れる新井田川の段丘左岸、標高10～20mに立地しています。遺跡の現状は畑地・宅地・墓地で、新井田川に向かう緩やかな傾斜地となっています。

本遺跡は、大正15年に東北大学により本格的な発掘調査が行われ、縄文前期および中期の土器片や獣骨・貝殻などが出土したため、貝塚および集落遺跡として知られています。東北地方北部における縄文時代前期・中期の代表的な土器として知られる「円筒土器」は、三内丸山遺跡で有名となりましたが、実は一王寺遺跡の資料と、五所川原市オセドウ貝塚の資料から名付けられたものです。

八戸市では平成6年より、遺跡の範囲・内容の確認調査と、墓地造成に伴う発掘調査を行い、縄文中期後葉・後期前葉・晩期の竪穴住居跡などが見つかっています。遺跡内には、縄文早期から晩期の遺物が出土しているため、縄文時代のほとんど全ての時期にムラが作られていたものと思われまます。

2. 今年度の調査成果

今年度は、昨年度に検出した縄文時代後期の捨て場のほか、遺跡南側に広がる畑の傾斜面を中心に調査地点を設定しました。調査はトレンチ方式で行い、縄文時代の遺構が確認できる地層まで人力で掘り下げを行いました。

昨年度から継続調査している国史跡指定地付近の調査区では、縄文前・中期～後期の遺物が大量に出土する、盛土された捨て場(①)が見つかっています。この捨て場は沢地形へと傾斜が始まる地点に時代の境目が見られます。傾斜面には縄文前期～中期が、北側の平坦面には縄文中期～後期の遺物が層となって見つかりました。さらに、縄文後期の捨て場の下からは、縄文中期の竪穴住居跡が見つかりました。

山裾から傾斜する畑地に設けた調査地点からは、縄文中期の竪穴住居跡・埋設土器(③)・配石遺構(②)・遺物包含層を確認しました。配石遺構は拳～人頭大の角礫を集め、一部弧状に配置したものです。

今年度の調査により、遺跡南端に竪穴住居跡と捨て場が広がり、中央の山裾に配石や埋設土器など祭祀に関連する遺構が点在するなど当時のムラの様子を窺う情報が得られました。

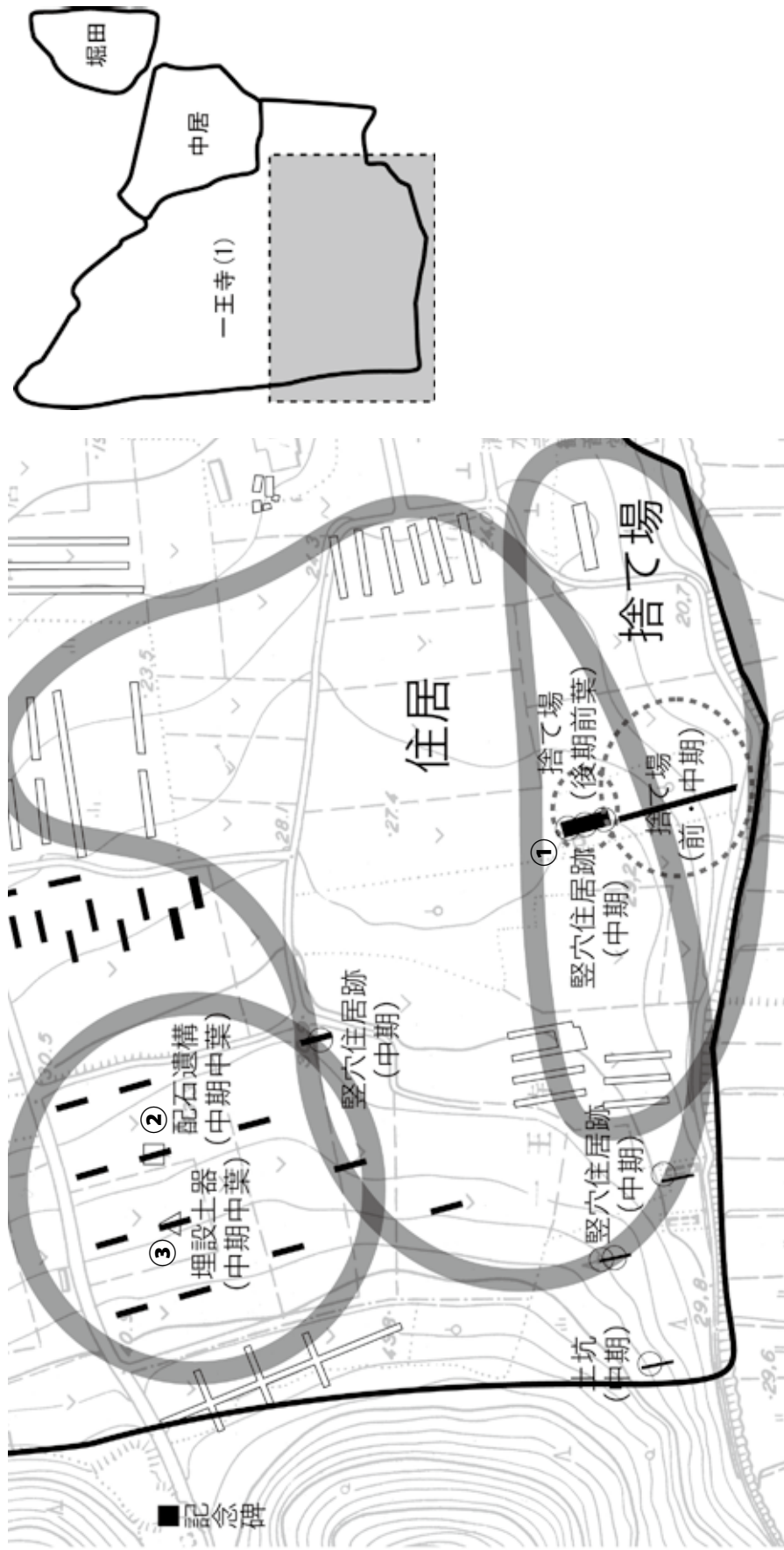
(小久保拓也)



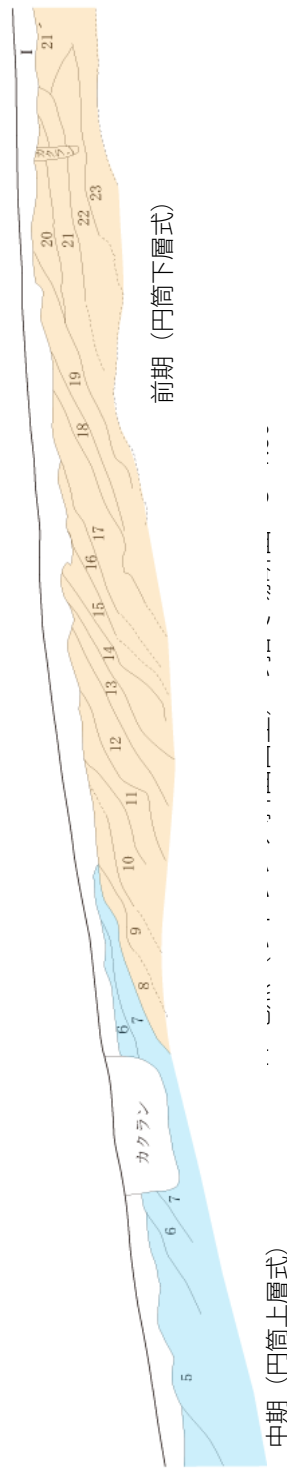
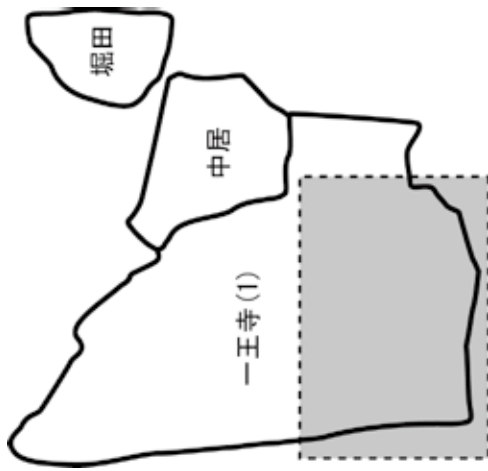
16 トレンチ 土器棺墓 (埋設土器)



14 トレンチ縄文中期中葉頃の配石遺構



一王寺(1)遺跡南側の様子



中期(円筒上層式)

前期(円筒下層式)

円筒下層式・上層式の土器が傾斜に沿って捨てられていました。

在地性の強い円筒上層式土器に、南東北で盛行した大木式土器が伴って出土しています。

1. 遺跡の概要

田面木遺跡は八戸市田面木地区に所在します。遺跡範囲は東西 400 m、南北 800 m、総面積約 63,600 m²で、北北東に向かってゆるやかに傾斜する標高 25 ～ 50m の丘陵上に広がっています。

本遺跡の調査は昭和 62 年から行なわれており、現在までに第 33 地点の調査が終了しています。これまでの調査成果によると、奈良・平安時代の竪穴住居跡が多数検出されているので、主に古代の集落跡であることがわかっています。

2. 今年度の調査成果

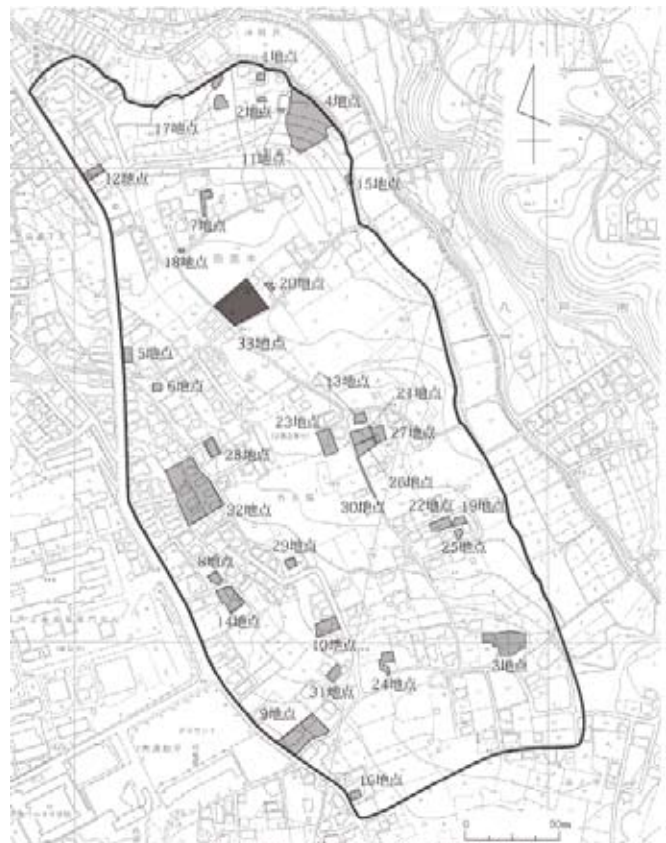
今年度調査した第 33 地点は、遺跡中央からやや北西寄りの地点で、現況ではほぼ平坦な場所に該当します。検出された遺構は竪穴住居跡 18 棟、竪穴遺構 2 棟、溝 1 条、掘立柱建物跡堀跡、柱穴群、井戸跡 3 基、焼土遺構 5 基、性格不明遺構 1 基です。出土した遺物は縄文土器、土師器、須恵器、鉄製品、土製品です。

検出された竪穴住居跡は出土した土器（土師器）からいずれも奈良・平安時代のものであることがわかりました。溝跡・掘立柱建物跡・井戸跡・焼土遺構は古代の竪穴住居跡を壊して作られていたので、中世以降のものと考えられます。

今回の調査において注目すべき成果としては、SI43 竪穴住居跡にみられた遺物の出土状況です。この竪穴住居跡の北壁中央にはカマドが作られています、そのカマドの右側から土師器（球胴甕の下半分を打ち欠いたもの）を利用した置台が 2 つ並んで出土しました。そのうち 1 つの置台には土師器が上に置かれていました。同様の出土事例は過去に調査された SI19 竪穴住居跡にみられ、SI 4・23 竪穴住居跡では置台のみが確認されています。置台と置かれている土器の用途についてはよくわかりませんが、カマド近くにあることから調理に関係するものであるかもしれません。カマドの右側に置台を配置する竪穴住居跡は出土した土師器の特徴から、いずれも 8 世紀前半の年代（奈良時代前半）に位置付けられるので、この時代に共通した生活スタイルであった可能性が高いと思われます。

また、置台の少し南側には同じような形の土師器の坏が底を上側にして 3 枚重ねられた状態で出土し、さらにその上に土師器の高坏が重ねられていました。また、それらの土器の直下から大きな貝殻が出土しました。このことから、土器を丁寧に重ねたというより、むしろ生活していた住居を去る際の儀式的な要素があったのかもしれない。

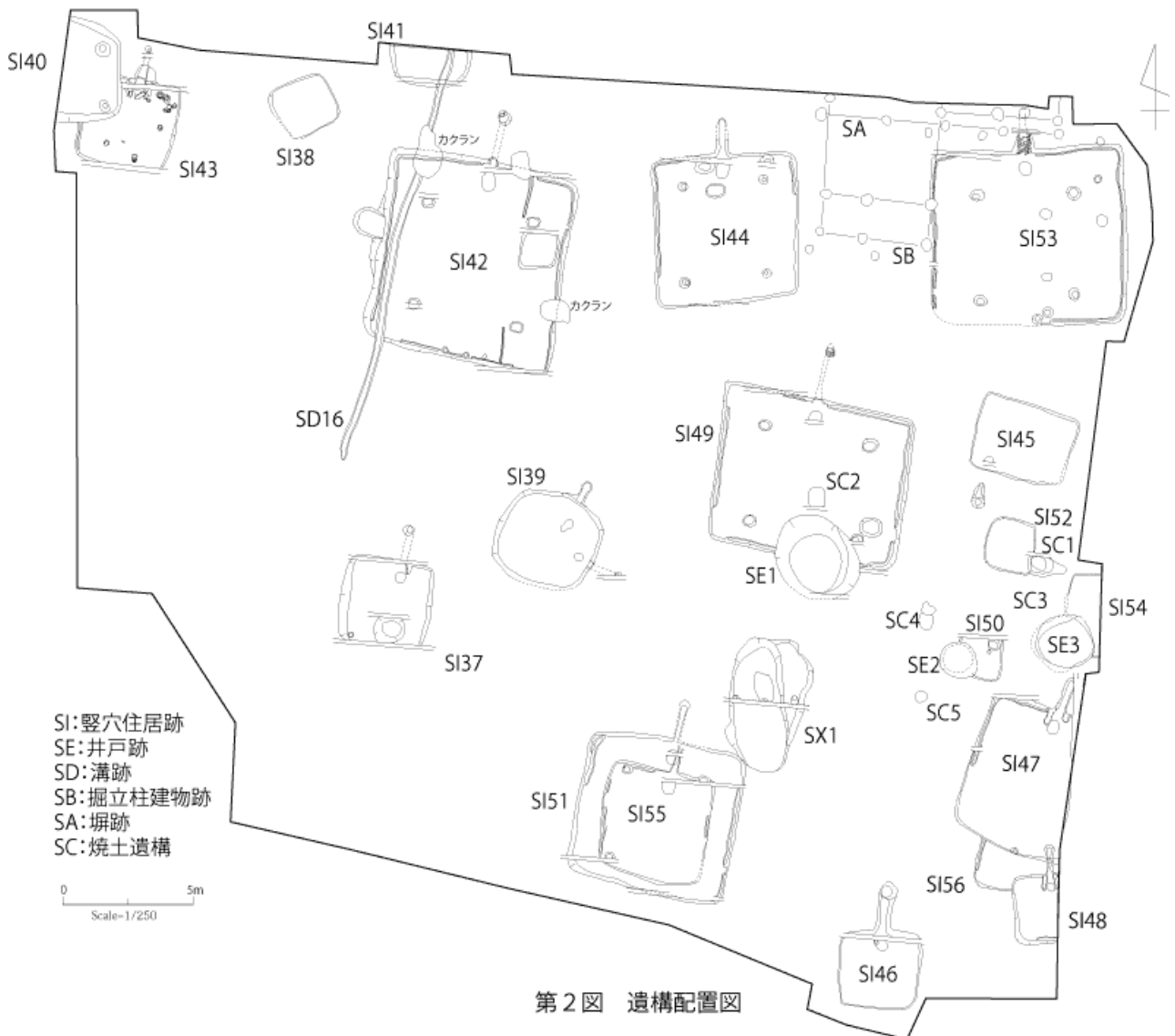
(杉山 陽亮)



第1図 田面木遺跡地形図



SI43 竪穴住居跡遺物検出状況（カマド右側）



1. 遺跡の位置と概要

八戸城跡は、八戸市内丸に位置する江戸時代の城跡を中心とする遺跡です。これまでの調査によって、縄文時代・弥生時代・古代・江戸時代の遺構・遺物が検出されています。

八戸城は、現在の三八城神社・三八城公園・八戸市公会堂にあたる本丸と、八戸市庁・南部会館・おがみ神社等が位置する二の丸から構成されています。寛永6年(1629)、盛岡藩の代官所として築城されたと伝えられ、寛文4年(1664)に八戸藩が成立した際に、藩主の居城と定められました。その後、明治4年(1871)の廃藩置県によって廃城となり、取り壊されるまで、八戸藩二万石の居城として使用されました。

城内部の様子は、「古御殿御絵図面」(文政10年(1827))・「新御殿御絵図面」(文保元年(1830))の2枚の絵図面によって伝えられています。

2. 主な遺構

今回の調査地点は、南の大手門から本丸内に入り、御殿へ至る途中に位置しています。調査面積は約600㎡で、縄文時代の竪穴住居跡・溝状土坑、古代の溝跡、江戸時代の柱穴・土坑・溝・堀跡を検出しました。

①堀跡 調査区北側には、直径約1mの柱穴からなる掘立柱の堀跡と、布掘りの溝の中に柱穴をもつ堀跡を、あわせて4条確認しました。掘立柱の堀跡は、調査区東端では南北方向に折れ曲がって続いていくようにみえます。これらの堀跡は、ほぼ平行につくられており、新旧関係が認められるため、同じような位置で何回も堀をつくり直したようです。古御殿の絵図には、ちょうどこの辺りに御殿と外を遮る板堀が描かれており、今回見つかった堀跡のいずれかが、絵図に記された堀に該当するのではないかと考えています。

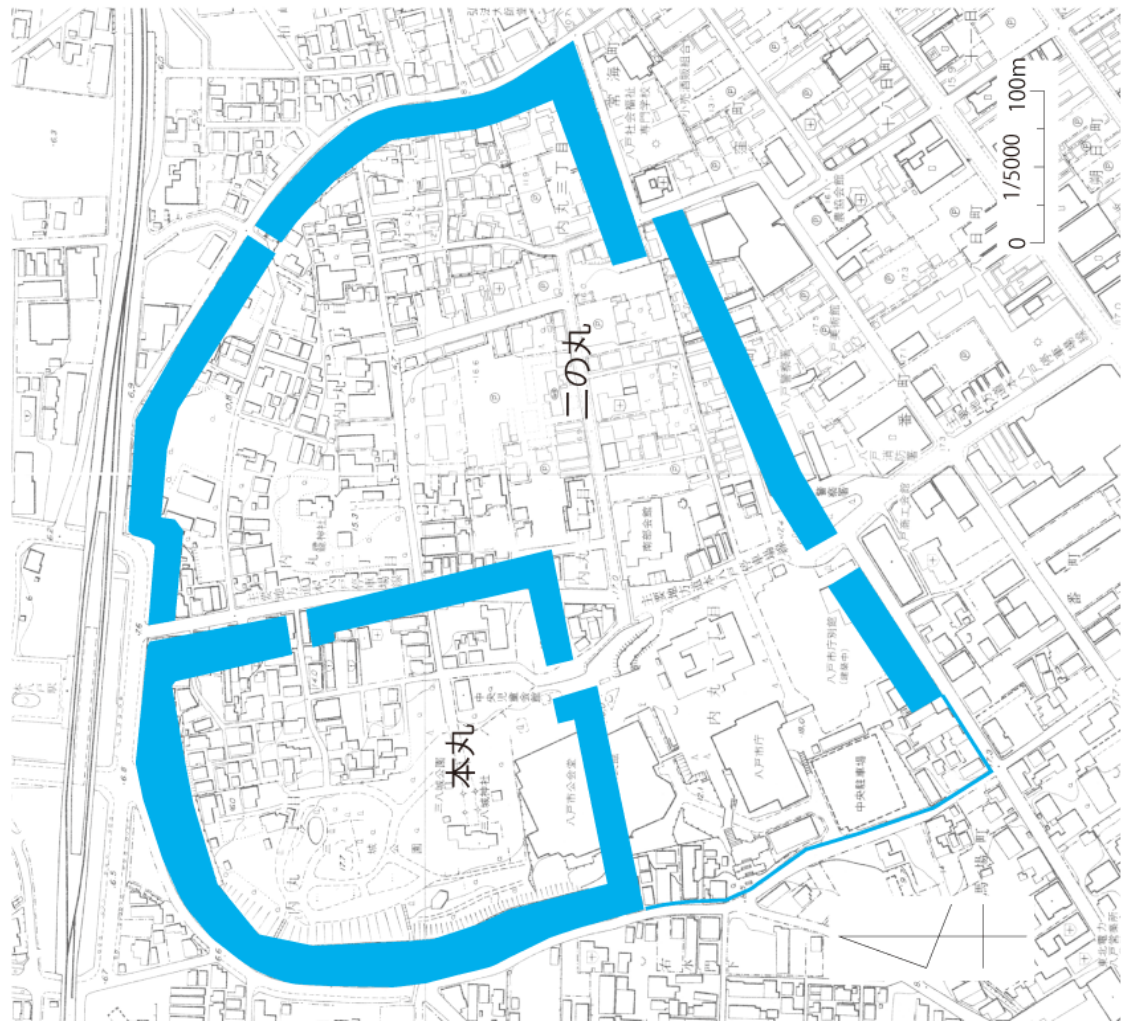
②堀跡 今回の調査では、調査区北端・調査区南端で東西方向、調査区中央～南にかけて南北方向に延びる3条の堀跡が見つかりました。いずれも絵図にはない遺構です。これらの堀跡は石垣等を伴わない素掘りのものですが、直線的で整然と仕上げられています。南北方向に延びる堀跡は、幅約7.5m、深さ1.6mの規模で長さ17m以上にわたり、御殿側にあたる堀底西側には、杭の列が見つっています。堀は、埋め土の状況から人為的に埋め戻されたと考えられます。遺物がまとまって捨てられている様子もないため、八戸城がお城として使われている時期に、大規模な造り替えによって一気に埋められたようです。

調査区南側には、柱穴を持たない大規模な掘り込みがいくつも連続しており、切り土や盛土といった整地を行った可能性が考えられます。

3. 主な遺物

遺物は、御殿に使われていたと思われる瓦が多く、陶磁器・金属製品等が出土しました。瓦は、平瓦・丸瓦がほとんどですが、南部家の家紋である向鶴が描かれた破片が1点出土しています。そのほか、調査区中央に位置する掘り込みの埋め土からは、煙管や瓦とともに約80点の琥珀が出土しました。これらの琥珀に加工の痕跡は見られず、遺構の形状も建物とは考えがたいため、こういった性格・用途をもつものはよくわかりません。産地分析は行っていませんが、琥珀の産地である久慈地方は八戸領内にあたるため、久慈産の可能性が考えられます。

(船場 昌子)

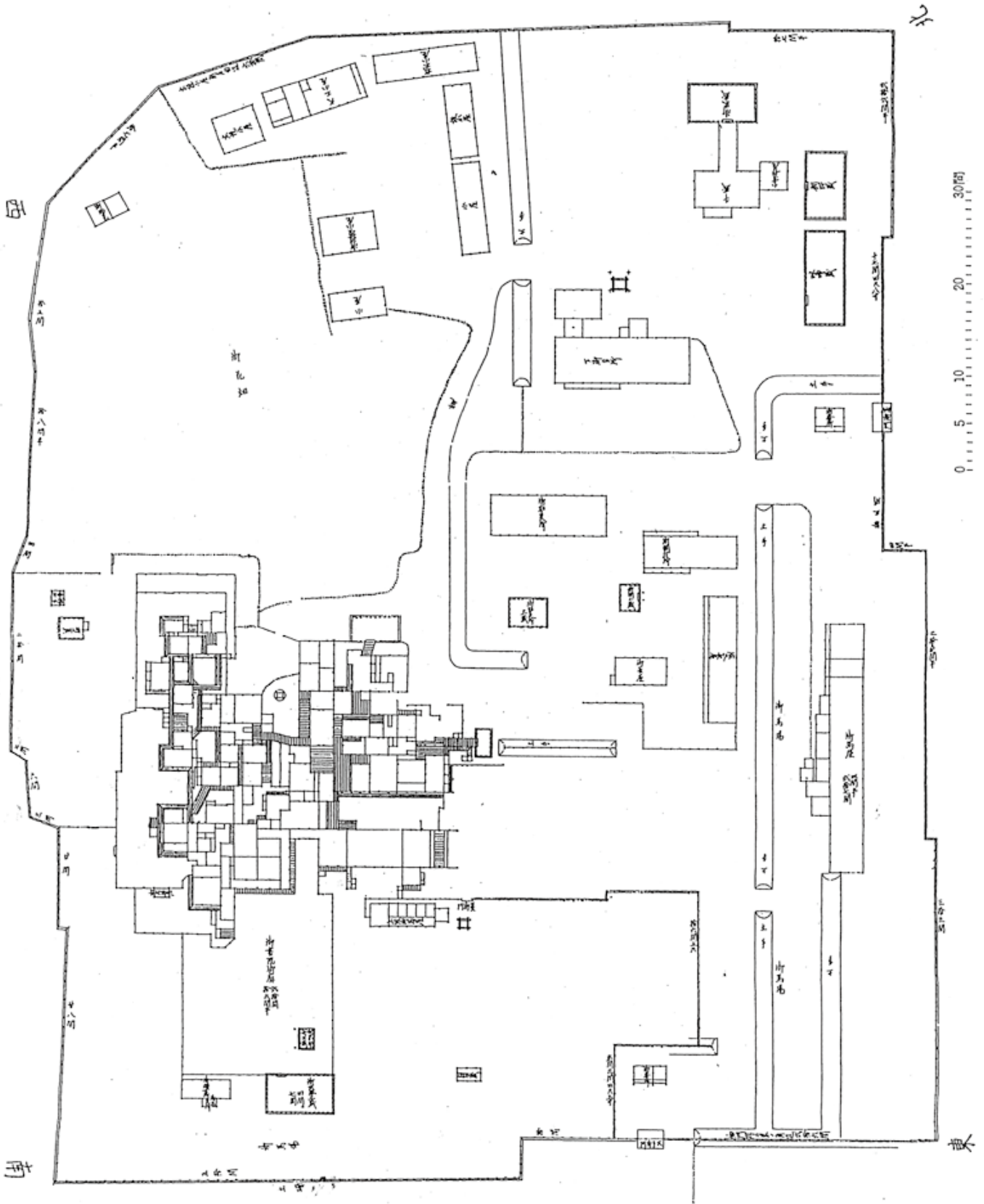


八戸城跡範囲想定図(S=1/5000)



八戸城跡19地点遺構配置図(S=1/200)

絵図から見た八戸の城下



古御殿御絵図

高島成侑 1981『八戸城の建築』文化財シリーズ第23号 八戸市教育委員会

古御殿御絵図面・全体図

八戸城下絵図

(八戸市立図書館所蔵)



報告会次第

- 13：00 開場・受け付け開始
- 13：30 開会あいさつ
- 13：35 20年度調査概要
- 13：40 調査成果報告 一王寺(1)遺跡
- 14：00 調査成果報告 田面木遺跡
- 14：20 10分休憩
- 14：30 調査成果報告 八戸城跡
- 14：50 発表「絵図から見る八戸の城下」
- 15：10 質疑応答
- 15：20 閉会あいさつ